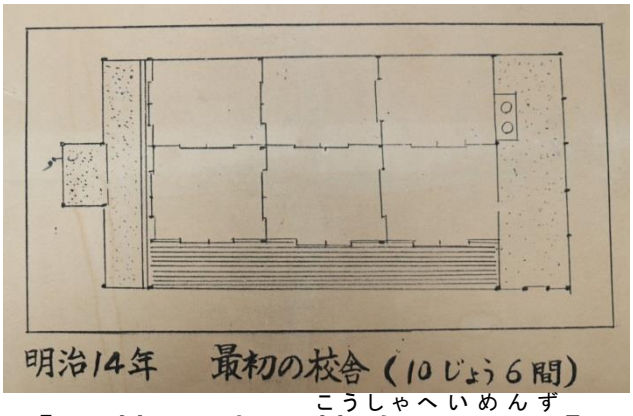
①千両小学校開校・明治時代の学校



【開校当時の校舎平面図】

明治14年4月には、校舎が新築され、千両尋常小学校が開校した。初等・中等とも、半年ごとの試験によって、6級から1級まで進学するしくみになっていた。明治20年ごろになると、1年から4年までとなった。寺子屋の延長のような形で授業がおこなわれ、読本、習字、作文、算術、ソロバン、体操が行なわれた。

明治35年には、高等科設置時の学級数増を見込んで、旧校舎西半分の2教室が増築されて2棟となった。

【八幡東部尋常高等小学校時代の校章】

明治40年3月に八幡村立八幡東部尋常高等小学校と、校名が変更された。明治41年からは、義務教育が6か年に延長され、それまでの高等科は尋常科5、6年と呼ばれた。さらにその上の延長2か年が高等科と呼ばれた。再び校舎が不足し、東側にさらに2教室を増築し、真ん中に玄関をとって立派な4教室の校舎となった。校舎建築の費用は村が負担した。

②職員住宅

明治40年、「校長はもちろん、できれば一般の教員も、その校区に住んで教育の成果を上げることが望ましい。」という郡視学の指導があった。千両村も県の補助金をもらい、校長住宅と教員住宅を、小学校近くの佐奈川べりに作った。終戦直後まで、歴代の校長は皆ここで生活をした。冠婚葬祭の近所付き合いから村の行事まで参加し、自分の子どもも千両小学校に通わせた。風呂はなく、近所の家にもらい風呂をしていたが、昭和になってから自家用の風呂が設備された。家の裏にはわずかばかりの畑があり、ねぎや大根などの野菜を作って、簡素な生活をしていた。

奥が校長住宅

手前が教員住宅

【職員住宅】

③大正時代の学校

大正2年には、裏校舎が増築された。裏校舎の東側3教室は教室の仕切りとなっていた大きな戸板が取り外しできるようになっていた。学芸会や卒業式など大きな行事のときは、大部屋にして使用していた。

大正7年には実業補習学校が併設され、高等科を卒業した者が、補習教育を受けるようになった。教科は農業や家事・裁縫などであるが、教師はほとんど小学校教員が兼務していた。

【裏校舎（手前はトイレ）】

④講堂の建設

大井校長は「千両の発展は子弟の教育しかなく、その教育の効果は立派な体格の持ち主でなくては上がらない。」と、雨天体操場兼講堂の建設を提唱した。開校当時にできた校舎を改築するということで、ようやく村民の承諾を得た。

10畳6間に仕切られている真ん中に2本の柱があり、柱を取りのぞくために、通しの桁や梁が何本も必要となった。その木材となる「杣坂峠の大松」の切り出し・運搬には村民があたった。その作業中、古川松作さんが、松の木の下になって亡くなられた。しかし、区民の熱心な奉仕により、大正14年11月に講堂が竣工した。

当時、講堂を持っていた学校は、ほとんどなかった。区民の集会場としても広く利用された。

【講堂】

⑤お宮(みや)そうじと神社参拝(さんぱい)

いつの頃からか、敬神宗祖(けいしんしゅうそ)の気持ちを養(やしな)うねらいで、遊び場の掃除を兼(か)ねて、4年生以上の子どもたちによるお宮そうじが行なわれるようになった。

子どもたちは、竹ぼうき・竹みを使って、自主的に早朝(そうちょう)そうじを行なった。部意識・通学団意識が育つことにつながった。部ごとに、犬頭(けんとう)神社のそうじをする日が決まっていた。

男子…拝殿(はいでん)前と西側道路、女子…芝居(しばい)小屋前と東側道路

神社参拝は毎月1日に行なわれた。4年生以上の児童が各戸(かっこ)一人ずつ、午前6時30分に社(やしろ)前に集合した。学校の職員は、上(かみ)下(しも)通学団顧問(こもん)が一人ずつ交代で出席した。担当職員の合図で整列し、2拝(はい)2拍手(はくしゅ)1拝(ぱい)のあと、神社参拝の歌を合唱し、校長または教頭の説話(せつわ)を聞いて解散(かいさん)となった。

【昭和３０年頃の道路作業】

⑥戦時下・終戦当時の学校

5年生以上は週1時間の武道の授業で、短杖（長さ1．4mほどの竹の棒）を持って、軍事訓練のようなことが教えられた。

昭和19年ころから、疎開により、児童数は急増した。サイレンや半鐘が鳴り響くと、防空頭巾をかぶって一斉下校した。

昭和20年に入ると、授業は1年間停止になった。食料を作るために運動場をほり起こしてさつまいも畑にした。上の山住宅は、学校の農場として麦やさつまいもが作付けされた。高等科2年男子中、長男を除く全員（8名）が、豊川海軍工廠に学徒動員された。

【麦刈り（昭和３０年頃）】

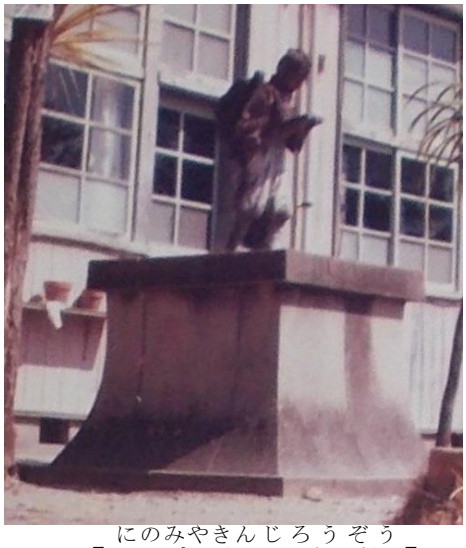
8月の終戦後、マッカーサー司令の命令により、教科書が使えなくなった。11月頃、新聞紙大の紙に印刷されている教科書が各人に2、3枚ずつ配給され、それを折ったり切ったりして糸を使ってとじ、教科書として使った。

⑦戦後の学校・近代教育へ

本校の給食は昭和22年6月頃開始された。最初は、主食は自分で持ってきて、おかずだけが配給された。

この頃、食器の洗い場はなく、屋外に渡り板をしき、その上でバケツの水で洗っていた。洗剤はなかったので油がとれず、衛生的でなかった。そこで、講堂東の空き地に宿直室兼給食室を新築することになり、昭和24年6月頃完成した。当時は最新式のモデル給食室であり、千両の自慢の建物だった。

昭和31年には、明治42年建設の校舎がとりはらわれ、新たに5教室が新築された。旧校舎跡は整地され、運動場が拡張された。二宮金次郎像は、村民の強い要望により、新校舎の職員室前に移転された。


【二宮金次郎像】

昭和33年には16ミリ映写機が導入され、授業に映画がとり入れられるようになった。続いて昭和34年には教育用テレビが各教室に配置され、いよいよ近代的な教育が受けられるようになった。